

目 次

論 文

西アジア都市形成期の土器焼成技術

—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—

小泉 龍人 1

エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について

矢澤 健 23

研究ノート

骨角器インダストリーに見る新石器化の一側面

—技術選択と原材料からの検討—

新井 才二 47

資料紹介

初期イスラーム時代のファイユーム陶器

—ベナキ博物館所蔵資料から—

長谷川 奏 57

動 向

アルメニアの文化遺産分野における日本の国際協力

有村 誠・藤井 純夫 61

紀元前5千年紀イランをテーマとした国際ワークショップ

三木 健裕 69

イラン、テヘラン大学で開催された「若手考古学者国際会議」に参加して

安倍 雅史・三木 健裕 75

米国オリエント学会 2013 年大会

近藤 康久 79

報 告

日本西アジア考古学会 2012 年度ワークショップ A「西アジア青銅器時代の葬制」報告

久米 正吾 83

西アジア考古学関連学術論文・出版物

87

西アジア発掘調査報告会報告一覧・調査彙報

93

投稿規定・執筆要項

95

編集後記

イラン、テヘラン大学で開催された「若手考古学者国際会議」に参加して

安倍 雅史・三木 健裕

A Report on the International Congress of Young Archaeologists, 2013 Held at the University of Tehran

Masashi ABE and Takehiro MIKI

キーワード：イラン考古学、学会報告、学術交流

Key-words: Iranian archaeology, congress report, academic exchange

1. はじめに

2013年10月27日から30日にかけての4日間、イランのテヘラン大学において「若手考古学者国際会議（International Congress of Young Archaeologists）」と銘打たれた国際会議が開催された（図1、図2）（Azizi et al. 2013）。

日本からは、大沼克彦氏（国士舘大学）、安倍雅史（東京文化財研究所）、三木健裕（東京大学）の3名が、テヘ

ラン大学から招待を受け、この国際会議に参加した。この動向では、この国際会議の歴史と今回の開催にいたる背景、そして国際会議の概要に関して紹介したい。

2. 若手考古学者国際会議の歴史と今回の開催にいたる背景

この会議は、もともとイラン国内の学生、若手研究者に発表の機会を与えることを目的に、ハミード・ファヒム（Hamid Fahimi）氏によって設立された。第1回目の会議は、「若手考古学者会議（Congress of Young Archaeologists）」という名称で、イラン文化遺産省（ICHO: The Iranian Cultural Heritage Organization）の協力のもと2000年に実施されている。その後、3年おき、2003年と2006年に、第2回、第3回目の会議がテヘラン大学で開催されている。

今回の会議は第4回目に相当し、テヘラン大学の大学院生であるホセイン・アジジ（Hossein Azizi）氏とモルテザ・ハーニプール（Morteza Khanipur）氏が中心となって会議を企画した。

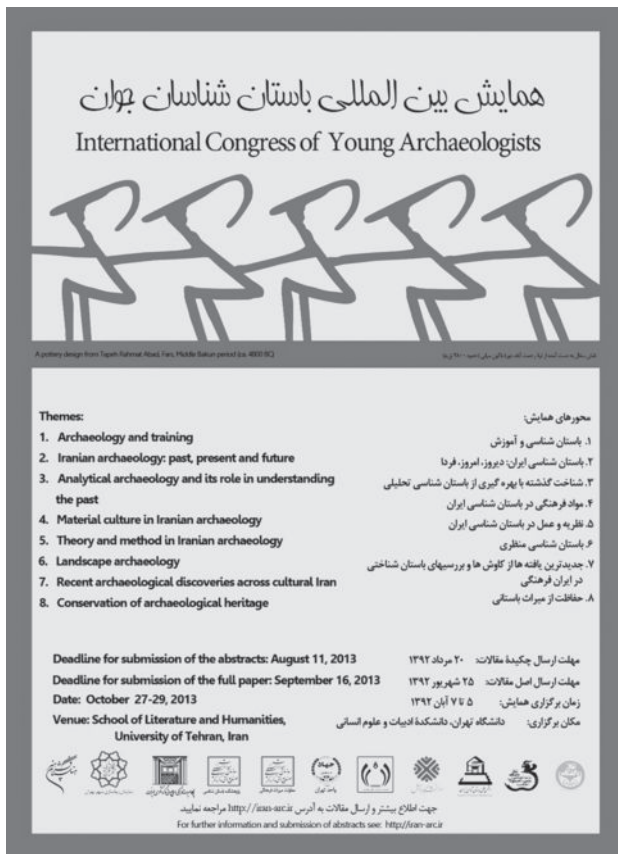


図1 「若手考古学者国際会議」の案内



図2 「若手考古学者国際会議」の会場となったテヘラン大学

企画者は、今回、7年ぶりに会議を再開するにあたり、「国際 (International)」という文字を新たに付け加え、会議の名称を「若手考古学者国際会議 (International Congress of Young Archaeologists)」に変更した。この会議の名称変更には、イラン考古学を今後担う大学院生2人のメッセージがこめられている。

1979年のイラン革命以降、長年、外国調査団がイラン国内で発掘調査許可を得ることは非常に難しい状況が続いていた。しかし、2001年にマスード・アザルヌーシュ (Massoud Azarnoush) 氏がイラン考古学研究センター (ICAR: Iranian Center for Archaeological Research) の長に就任すると、再び諸外国に門戸が開かれ、外国調査団による発掘調査が認められるようになる。とくに2004年、マスード・アザルヌーシュ氏が、イランのファールス地方シヴァンド川ダム建設に伴う水没地域の緊急発掘調査への協力を国際社会に対し広く呼び掛けたことが契機となり、多くの外国調査団がイラン国内で活動するようになる。このシヴァンド川流域の緊急発掘調査だけでも、計7チームもの外国調査団が参加している (Fahimi and Alizadeh 2012)。

しかし、このような状況は長くは続かなかった。イランの核開発問題をめぐり、2005年ごろから、徐々にイランと欧米諸国の間で政治的緊張が高まり、多くの外国調査団がイラン国内での発掘調査を已む無く中断していった。例えば、ザグロス地域における農耕・牧畜の起源を探るロジャー・マシューズ (Roger Matthews) 氏率いるイギリス隊は、イラン国内において、ザグロスの新石器時代を研究する上で非常に有望な遺跡シェイカバード (Sheikh-e Abad) とジャニ (Jani) の発掘調査を2008年に開始したが、たった1年で発掘調査を中断し、フィールドをイラク・クルディスタンへと移している。

ホセイン・アジジ氏によれば、昨年の2012年にイラン国内で発掘調査を実施した外国調査団は、日本、フランス、イタリアの3チームのみであった。

しかし、今年に入り、この状況が好転しようとしている。2013年6月14日にイラン国内で大統領選挙が実施され、欧米諸国との緊張緩和を掲げる保守穏健派のハサン・ロウハニ (Hassan Rouhani) 氏が新大統領に当選した。それに伴い閣僚も一新し、8月17日には、イラン考古学研究センターの上部組織であるイラン文化遺産手工芸観光省 (ICHHTO: Iranian Cultural Heritage, Handicrafts and Tourism Organization) の大臣にモハマド・アリ・ナジャフィ (Mohammad Ali Najafi) 氏が新たに就任した。このことが契機となり、イラン国内では、再び外国調査団に対し門戸を開放しようとする機運が急速に高まっている。

今回、企画者が「若手考古学者国際会議」に名称変更し

たのも、このような背景による。企画者は、今回の会議をイランの学生、若手研究者が研究発表を行うとともに、海外からの若手研究者と交流する場にしたいと思い立ち、今回の会議を企画した。

そのため、今回の会議にはイラン考古学を研究する計14名の若手およびベテランの外国人研究者が主催者側より招待を受け、この会議に参加した。

3. 若手考古学者国際会議の概要

若手考古学者国際会議は、2013年10月27日から30日にかけて4日間に渡り、イランのテヘラン大学において開催された (図3)。

イラン国内では、会議に先立ち、「35歳以下の学生、若手研究者であること」を条件に、研究発表の受付が行われた。驚くことに、イラン国内から合わせて600件近くの発表申し込みがあり、そのうち当日の研究発表を認められたのが37件、ポスター発表のみを認められたのが68件であった。イラン国内で考古学を専攻する学生、若手研究者の多さ、層の厚さに驚かされた。

研究発表は、先史時代、歴史時代、イスラーム時代、考古分布調査、考古科学の5つのセッションに分かれて行われた。研究発表の大半は、イランの学生、若手研究者によるものであったが、非常にレベルの高い研究発表が続いた。

この研究発表には、日本、イギリス、ドイツ、アメリカから計8名の若手研究者が招待され、発表を行っている。

日本からは安倍と三木の2名が参加し、安倍が「A Study on the Early Pottery Neolithic Chipped Stone Assemblage from Rahamatabad (ラハマトバード遺跡出土の前期土器新石器時代の打製石器に関する研究)」、三木が「The Acceptance of Black on Buff Ware in the 5th Millennium of Southwest Iran: A Reanalysis of Pottery Assemblage from Tall-i Jari A (前5千年紀、イラン南西部における鈍黄色黒彩土器の受容過程：タル・イ・ジャリ



図3 会場内の様子

A 遺跡出土土器群の再分析)」という研究発表を行った。

イギリスからは、銅石器時代のバクーン文化を研究するケンブリッジ大学大学院生のヘレン・テイラー (Helen Taylor) 氏、ドイツからはザグロス地域の新石器時代を研究するドイツ考古学研究所研究員のユディット・トマルスキー (Judith Thomalsky) 氏、同じくドイツ考古学研究所研究員で GIS 考古学を専門とするアンドレア・リッチ (Andrea Ricci) 氏、西アジア全体を網羅する前 3 千年紀の土器編年の構築を目指す ARCANE Project に参加しているチュービンゲン大学大学院生のゲオルク・ノイマン (Georg Neumann) 氏、またアメリカからは、ゴルガン平野の青銅器時代を研究するペンシルバニア大学大学院生のカイル・オルソン (Kyle Olson) 氏、同じくペンシルバニア大学大学院生でイラク・クルディスタンで考古調査に参加しているダレン・アシュビー (Darren Ashby) 氏が参加し、それぞれ研究発表を行った。

また、今回の国際会議では、研究発表のみならず記念講演も企画された。記念講演には、アメリカ・シカゴ大学オリエント研究所の所長であるギル・シュタイン (Gil Stein) 氏とイギリス・レディング大学のロジャー・マシューズ氏が招待され、それぞれ「南メソポタミアにおける国家形成」と「ザグロス地域の新石器化」に関する記念講演を行った。

また、面白い試みとして、今回の会議には、研究発表・講演のほかに、学生がベテラン外国人研究者から考古学の方法論・研究方法を学べるように、講義形式のワークショップが組み込まれていた。ワークショップのテーマには、土壌微細形態学などイラン国内ではいまだ専門家が少ないテーマが選ばれていた。

日本から参加した国士舘大学の沼田克彦氏は、石器製作に関するワークショップを担当した。沼田氏のワークショップは人気が高く、学生を中心に 20 名近くが参加していた。沼田氏は、日本からわざわざ白滝産の黒曜石を持

参し、石器製作を実演、その後、学生に石割りの指導を行った (図 4)。

ほかにもイエール大学のフランク・ホール (Frank Hole) 氏やフランス国立科学研究センターのマリジャン・マシュコル (Marjan Mashkor) 氏、レディング大学のウェンディー・マシューズ (Wendy Matthews) 氏といった錚々たる顔ぶれがワークショップの講師として招待され、「民族考古学」、「動物考古学」、「土壌微細形態学」の講義を担当した。

4. おわりに

今回の若手考古学者国際会議は、再び外国調査団をイランに受け入れようという機運が高まる中、企画され開催された。そのため、会議全体は歓迎ムードに包まれ、会議中もイランの若手研究者が積極的に話しかけてくれた。

このように現在、イラン国内で、外国調査団を受け入れようという機運が高まっているのには、二つの理由があると考えられる。まず、純粋に学術的な交流を持ちたいというのが一番目の理由であろう。また、もう一つの理由に、調査費不足という現実的な問題があると感じられた。イラン経済は経済制裁の影響を受け、現在、不況に陥っている。イラン国内の若手研究者もこの影響を被り、調査費不足という問題に直面している。現在、イラン国内で実施されている調査は、予算のかからない試掘調査や分布調査が多くを占めている。イランの若手研究者と話をしたが、外国人研究者を受け入れ規模の大きな発掘調査を実施したいというのも理由の一つであると感じられた。

イラン考古学を研究するものにとって、イランの現状は非常に望ましい状況である。今回、会議中に、記念講演を行ったギル・シュタイン氏と昼食をともにする機会があったが、シカゴ大学オリエント研究所もイラン国内での発掘調査の再開を計画しているとのことであった。

また、現在、イラクのクルディスタンで活動を行っているロジャー・マシューズ氏も、イラン・ザグロスのシェイカバード遺跡とジャニ遺跡の発掘調査の再開を検討しているとのことであった。

今後、イラン人研究者と外国人研究者との間で交流が進み、イラン考古学がさらに発展していくことを望む。

参考文献

- Azizi, H., M. Khanipour and R. Naseri 2013 *Abstracts: International Congress of Young Archaeologists*. Tehran, the University of Tehran.
- Fahimi, H. and K. Alizadeh 2012 Foreword. In H. Fahimi and K. Alizadeh (eds.), *NAMVARNAMEH: Papers in Honour of Massoud Azarnoush*, 5-7. Tehran, IranNegar.



図 4 石器製作を指導する沼田氏

安倍 雅史

東京文化財研究所

Masashi ABE

*National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo*

三木 健裕

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

Takehiro MIKI

The University of Tokyo